

今年の八学光星は強打だ
けではない。例年と異なり、「**一足**」という強力な武器が加わった。

仲井監督は、昨夏の県大会決勝・対三沢商戦での延長サヨナラ負けを教訓にした。右投手投げの野田の術

駆け上がれ 頂点へ

光星 2年ぶり夏の甲子園

下

中には、やはり、わずか4安打で揺さぶられなかったのが、結果的に響いた格好だ。「お前たちには足がある」。現チームが発足した昨秋から、打線が振るわなかった場合の局面を打開するために、機動力を生かす

光る機動力

隙を突き、全員で攻撃

ことを意識付けた。

昨年の夏の県大会の盗塁数はわずか「1」。ところが今年6試合で「23」と、例年とは比べものにならない数に上った。

監督は「打てなきゃ終わりじゃない」と強調。「セーフティバントなど、機動力を使って隙を突き、小さい穴をこじ開けて、みんなで徹底して攻める。そんな野球ができるようになった」とチームの成長を振り返る。仲井



ダッシュする伊藤(左)ら八学光星ナイン。新たな武器となった機動力を甲子園でも発揮する。11月3日前、兵庫県尼崎市・ベイコム野球場

返る。

指揮官が絶大な信頼を置いたのは、50センチを切る俊足の1番伊藤だ。大きなリードを取ってバツテリーに圧力をかけ、走って好機を広げる。「自チームにとってこれほど頼れる、そして相手チームにとって嫌な打者はいない」(仲井監督)と評価は高い。県大会9盗塁のリードオフマンは「自分が出塁すれば得点のチャンスが増え、チームが勢いづく。常に次の塁を狙い続ける」と強気に話す。

チームは例年、本格派投手に強い半面、左の軟投派や変則投手に苦労することが多かった。今年は練習で約30人いる左右の上、横手の投げの控え投手を徹底的に打ち込んだ。投本間の距離が通常より5センチ短い「近距離バツティング」では、140センチに設定したマシンの直球を打つ一方、100センチに満たない緩いボールを引

きつけて遠くへ飛ばす「ハーフバツティング」と呼ばれる練習も同時に行い、遅い変化球から速球まで対応できる力を養った。その成果が実り、県大会では意表を突くこととする相手の投手起用を難なく攻略。チームトップの10打点を挙げた小林は「変則投手と向かい合っても、今年の打線ははまることはない」と自信たっぷり。仲井監督も「数多い打撃投手のおかげで、打力がアップした」と胸を張った。

開幕まであと3日に迫った。主将奥村は、昨年夏のレギュラーだった馬場のミットを譲り受け、甲子園でも使うつもりだ。「悔しかつた先輩の思い。ベンチ入りできなかつた仲間。そして青森大会で敗れたチームの選手たち。いろんな人の思いを背負って戦いたい」。2011、12年も準優勝。あと一歩で届かなかった深紅の大優勝旗を手にするたぬ、ナイン一丸となり、大舞台での戦いに挑む。(本田海輝)